

# 教職大学院

## Newsletter

# No. 21

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2010.04.24

### 実践を「語る」「傾聴する」「書く」「読む」そして「コミュニティ」を紡ぐ

教職開発専攻長 松木健一

教職大学院は2008年に創設し、本年度で2順目に入る。教職大学院の立ち上げに当たっては、学校拠点方式の専門職大学院の必要性和重要性について、傷のついたLPレコードのように繰り返し訴え続けてきた。今にして思えば、その戦略は極めてレトロであったかもしれない。

しかし、この2年間、実に多くの方々と共に歩む中で、確かな手ごたえを得ることができ、教職大学院の必要性和重要性を確信するに至っている。今年度は、この確信を更に深化させ、より多くの方々と共に共有できる仕組みの構築に励んでいきたいと思う。

さて、それでは何を確信したかということなのだが、教育・文化・科学等にかかわる言説と、目の前にいる子どもとのかかわりの統合、月並みの言葉になるが、理論と実践の融合の方法についてである。

理論と実践の架橋については、およそ言葉が生まれ専門分野が発生してからこのかた、誰もが口にし、繰り返し、繰り返し唱えられてきたことなのだろう。そして、いまだに実現できていない課題でもある。無責任な大学人は、理論は伝えるが実践は勝手にやれと言う。それでは、本当のところ理論にもなっていないことなど、気付きもしない。あるいは、教育学部などでは理論は講義で、実践は教育実習で都合よく分け、やはりその統合は学生任せにしてきた。

教育にかかわる言説と実践とを統合するということは、少し大仰に言うとも、有史以来の人類の歩んできた歴史や文化や科学を踏まえて、今日目の前にいる子どもと対峙するということである。人類の歴史を我が身に体現して子どもと向き合い、人類が目指す方向を曲がりなりにも自分の指でさし示しながら、子どもと共に歩むということの意味する。あるいは個体発生に置き換えるならば、教師が一人の個人として、どう生きていくのかを振り返りながら、迷いながらもその答えを自分に言いつつ聴かせつつ、子どもに対峙することになる。

この厄介でしかも本質的なことに、私たちは目を背けてきた。教職大学院のこの2年間の実践は、その答えの一つを、

幾つかの手掛かりとなる「ことば」を得ながら、つかみかけた経緯ではなかったかと思う。

その「ことば」とは、例えば、実践を「振り返る(省察)」であり、実践を振り返って「語る」ということであり、そして、具体的な実践を取り上げて「事例研究」をするということである。さらに、実践を語るためにはそれを「傾聴」してくれる「同僚」を得て、実践を「協働」する「コミュニティ」を創造するということである。

このような「ことば」を手掛かりに、私たちは実践を振り返り語り、傾聴し合うことを行ってきた。そして、実践を振り返り語り、傾聴する過程の中に身を置いて初めて、(さらには、実践を自身のことばで綴る過程の中に身を沈めて初めて)優れた言説や他者の実践記録が、真に、身体に染み入り、自身の実践と融合する瞬間を得ることができた。人類の財産である優れた言説や教育実践記録は、私たちをより長い時間の空間へ、あるいはより広い行動空間へ導いてくれた。

しかし、優れた言説や教育実践記録は、それ単独ではただの紙切れ、あるいは毒でもあろう。「書物を読む人は頭を下げて読む。教える聞く人は頭を下げて聞く」(曾我量深「歎異抄聴記」)である。同僚と共に実践を語り傾聴し合い、確定共有し合う世界を広げる過程にあるからこそ、優れた言説や教育実践記録が輝きを帯びてくるのだろう。

輝くのは優れた言説や教育実践記録ばかりではない。確定共有しようと階段を登るときならば、一見つたなく見える若手の実践記録もまぶしいばかりの光を放ち、自自分の実践をもより広い地平へ導き出さざるを得なくなるものである。

私たちのこの2年間の取組は、この確認ではなかったかと思う。これから教職大学院に課せられた課題は、ここで述べてきたような冗長な言い回しではなく、しゃきとした言葉と実践とそれを支えるコミュニティの創造、しかも、幾つものコミュニティを創造しつなぎ合うことを通してネットワークを構築することではないか。課題(夢)は大きい。

# Staff 紹介

## 吉村 治広 よしむら はるひろ

2年前に教育地域科学部芸術・保健体育教育講座に着任した吉村治広です。この4月から、家庭科教育の松田淑子先生と入れ替わりで教職大学院に配置換え(兼担)となりました。(長期的なローテーションで学校教育の実務経験を持つ教科教育担当教員がスタッフに加わります。)特に、今年度は、協働研究員や非常勤講師等の増員により、外部からの評価も高い本学教職大学院が更に多彩なメンバー構成となりました。今、そこにかかわっていく責任感とともに、自分自身にとっての新たな学びを得る機会になるという期待を強く感じています。

私の専門は音楽科教育で、研究の対象としているのはポピュラー音楽の教材化という、その筋ではほとんど未踏の領域です。それが未踏であるのは、教員養成や学校教育における文化再生産がもたらす音楽的認識が時代状況に合わなくなってきた上に、方法論の欠如という実践的な課題を抱えていることが大きな要因です。例えば、音楽に対して、正しく高い音楽とそうでない音楽という価値付けが働いている場合が少なくありません。それは、子どもたちに興味・関心を持つべき、さらには、好きになるべき特定の音楽があるというメッセージを発することになります。

ある職業系高校で教壇に立っていたころ、毎年、教科書の曲を抜こうとすると、決まって「何でこの歌を歌わなあかんのや?」という質問を受けました。それは、学校には学校で推奨される音楽があるというタテマエを受け入れたくないという素朴で、しかし、確かな異議申し立てでありました。事実、「歌いたい歌はほかにある」「音楽まで押しつけられるのは御免だ」との申し立てがあったこと自体、彼らの音楽に対する愛好心が強いからにほかなりません。あるいは、年間指導計画どおりにとりあえず指導する中で音楽観を拡大させ、最終的に帳尻を合わせる対応も考えられますが、少なくとも短期・中期的なモチベーションは確実に落ちてしまいます。何より、音楽に触れることになる授業への淡い期待を持って、ダメ元で意義を申し立てた彼らの思いを軽視することはできませんでした。以来、私の興味は、生徒の実態に即した、即ち、生徒の本音や生活経験と乖離しない学習内容をいかに組み立てるかということに焦点化されました。

試行錯誤しながらの取組であったため、特に初期段階では失敗したと感ずることも多くありました。しかし、その

成否とは別に、お互いにタテマエ不要の姿勢で向き合ったことで、彼らは驚くほど素直で、また好意的な反



応を返してくれました。後に、教育実践研究として報告することになる様々な学習の種を、生徒と共に楽しみながら見付けることができました。振り返ってみると、ここに私の教師人生の大きな転換点があったように思います。

一方で、子どもの視点に立ってどうかと問い続けていけば、否応なく、学校における様々な常識もとらえ直すことになります。時には、自分自身が子どもの立場で、その息苦しさを共有しているような感覚にとらわれることもありました。教師の現実としては、合理性とのバランスを図り、そちらを優先させなければならない場合も多いわけですが、子どもの主体性を求めるのであればこそ、このような感性もまた必要なものと考えます。

音楽という教科は一般的に、活動への内的動機付けが容易という特性があります。また、その学習に、子どもの内面が反映される表現活動が伴われるが故に、教師も子どもの意欲をリアルタイムで読み取る習性を自然と身に付けていきます。むしろ、その意識が強く働くあまり、体験としての活動そのものを追いがちでもありました。それを反省し、学習内容を担保して確かな学力を身に付けさせようとしているのが音楽科教育の今日的状況と言えます。この点で、強力な外的動機付けに頼るのではなく、生活経験から離れがちな学習内容を見直し、子どもの主体的な活動を志向し始めた他教科の動きとは対照的にも感じられます。

教科におけるこのような違いを例にとっても、異なる視点や経験を持った者同士がかかわり合う教職大学院の意義と効果は明らかです。この新しいステージで、私もこれまでの経験を生かしながら、多くの先生方と刺激し合っ前に進みたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

## 津田 由起枝 つだ ゆきえ

今年度、教職大学院の実務家教員として福井県から派遣されました津田由起枝です。久しぶりに母校に入構してみても、福井大学がこんなに変容していることに、正直、驚きの念を隠せませんでした。少なくとも半世紀ぐらいは経過したと思われる学舎がすっかりリニューアルされたこと、多くの自家用車が構内を行き交っていること、アカデミーホールやその他の目新しい建築物が建てられていること、そして大学院教育学研究科に教職大学院が開設されたことなど、時代の要請の中で移りゆく大学の生き様をしみじみ実感している次第です。

これまでの32年間の自分を改めて振り返ると、本学を昭和52年3月に卒業した後、2年のへき地中学校への赴任、その後、福井市内の光陽中学校・明倫中学校・藤島中学校で合計19年の教員生活、県義務教育課・教育研究所で合計7年の教育行政の生活、至民中学校での4年の管理職の生活、そして本学へと目まぐるしく職場を異動する生活でした。とりわけ、ここ10年間は地域や社会が大きく変容する転換期の中での激動の教員人生だったように感じています。

私が教職に就いた昭和50年代は、学級定員は45人で何をするのも一斉指導中心、効率が最優先でした。どの中学校も部活動や受験ではいくつの部が上位入賞を勝ち取るか、トップレベルの学校に何人合格させられるかが学校や教員の関心事であり、外からの評価でもありました。そして、このような学校のスタイルに収まりきれない生徒は校則を乱して自己を主張し、教職員は日夜、生徒指導に振り回されるということが繰り返されていました。「荒れる中学校」という言葉が盛んに使われていた時代でした。それが平成の時代を迎え、いつのころからか「切れる中学生、切れる17歳」が社会現象になり、いじめや不登校、引きこもりが大きな社会問題になってきました。

つい最近まで学校現場に身を置いた者としてひしひしと感じるのは、結果としての学力の前に、まずは「健やかな心身」や「基本的な生活習慣・学習習慣」、「学ぼうとする意欲」、「人や物にかかわろうとする態度」などの育成なのではないかということです。根っこが不完全なままに学力の成果、部活動の成果だけを求め過ぎているような気がします。今、私たちは学校や教師の存在意義を改めて問われているような気がしてなりません。

私はここに来るまで、教職大学院の拠点校の一つである福井市至民中学校に4年間勤めさせていただきました。初めの2年は、教頭として、ソフト面・ハード面の柱づくりと新至民中学校の立ち上げ準備、次の1年は、やはり教頭

として、開校した新校舎の管理と開校後のソフトランディング、最後の1年は、今度は校長として、教職員共々、開校2年目を迎

えた至民中学校の教育システムの一層の充実を進めてきました。至民中学校を語る上で欠かせないのが毎週月曜日に行われる研究会です。全教員が自校や自身の教育を語れるようにするために、全体研究会、運営や授業研究の各部会、そしてこれらを支える企画開発委員会が続きました。時には、夜のとばりが下りるまで議論することもありました。多忙ではないかと思われるかもしれませんが、この議論こそが同僚性を持って学校を動かしていくための生命線であり、だからこそ全教員が自信を持って進んでいけると確信しています。実に多くの人々とかかわりながら様々なアイデアや情報をやり取りし、多くを語り合った内容の濃い貴重な年月だったと振り返っています。学校にかかわる者すべてが一つのチームとして心を合わせ、柔軟な発想を大切にに進んでいくことのすばらしさを学ばせてもらった4年間だったと幸せに感じています。

私は、これからの時代は「学校づくりはシステムづくり・アイデア探し・人の輪」であると確信しています。学校に求められるものは多種多様ですが、最も重要なことは、子どもたちが自信を持ってその後の人生を生き抜く基盤を築くということではないでしょうか。さらに、今後の地域や日本、世界を担う大人になるための土台をつくるのが学校の使命であるならば、「学校って何するところ？何ができるところ？」を今一度、学校にかかわるみんなと考えていくことから始める必要があるのではないのでしょうか。その議論の中からその学校づくりに必要なシステムや体制の構築、意識改革とアイデア探し、その学校づくりに共鳴して共に歩んでくれる人の輪を広げる努力が求められてくるはずですよ。

私たち実務家教員は大学教員と力を合わせ、各院生の所属する学校における様々な課題や研究テーマに寄り添い、理論と実践の融合を協働で創り上げるためのサポートをしていきたいと思えます。院生のみなさんが、それぞれにかかわる学校での教育課題と向き合い、それぞれがこれからの教育に携わる者としての力量を高めてくださることを切に願っています。どうぞよろしくお願ひします。



## 川上 純朗 かわかみ すみお

この度の異動で、福井市内の中学校から県派遣教員として赴任しました川上純朗です。着任後まだ日も浅く、自分の役割もよく飲み込めていない状態ですが、これまで29年間の高・小・中学校での教員および行政での実務経験を生かして、産声を上げた教職大学院の成長に少しでも寄与できたらと考えています。よろしくお願いします。

さて、福井大学教職大学院では、実際に授業や研究会に参画して、語り合っ、聴き合っ、省察して、書き記すことに重きを置いています。それは、専門職としての教師の成長は、自らの実践を振り返り、省察し、さらには次の実践に結び付ける事例研究のサイクルが重要だと考えているからです。そこで、私自身のこれまでの実務経験の中で大きな学びがあった場面を簡単に振り返ってみました。

大学卒業後、1年間の私立高等学校非常勤講師を経て、公立学校の教師となりました。理学部出身の私は、高等学校が第1希望だったのですが、赴任地が小学校ということで、最初は目の前が真っ暗になりました。各学年4学級の大規模校で、5年生の担任、隣のクラスは50歳代のベテラン教師。このシチュエーションに「お前本当に大丈夫か？」と自問自答した覚えがあります。しかし、周りから「若さだけで3年間は大丈夫」と言われましたが、温かく見守ってくれた同僚や保護者、そして慕ってくれるクラスの子もたちの支えで、周りに迷惑を掛けつつ何とか勤めることができました。この3年間は、授業研究に明け暮れた日々でした。この学校は授業研究が盛んで、毎年何らかの指定を受け、週2回の研究会が日課でした。2年目以降は、研究発表会の指定授業者としてその準備を含め、ほぼ3か月に1回の割合で公開授業を行いました。指導案作成が夢にまで出てくるほど追い詰められたこともありましたが、その後の授業づくりの基礎を培ったように思います。

何とか小学校教員免許も取得でき、ホッとした矢先、市内の中学校に異動となりました。小学校免許取得は何だったんだと思いつつ、これまでとは全く異なる教師生活が始まりました。この学校で学んだことは、なんと言っても部活動指導です。地区大会入賞は当たり前、ほぼ同年代の若い教員がお互いに成果を競い合う環境でした。その中で全く素人の野球部の顧問となり、連日練習を見に来る保護者や関係者の中、当初は途方に暮れました。とにかく熱意だけは負けないことを示すしかないと考え、個人の時間を最大限削って練習の時間を確保することに努めました。結果、

県優勝もできましたし、卒業生のうち7名が甲子園出場を果たしてくれました。しかし、このことより忘れられない事実があ



ります。それは、最初の年の秋に2名の2年生部員が部を去っていったのです。衝撃でした。それ以降、私の部活動経営は、途中退部者を絶対に出さないことを勝利より上の目標に置き、それを最後まで貫き通しました。

次の学校では、特別活動のおもしろさを学びました。その学校は、生徒会活動が大変盛んで、特に学校祭は生徒の若いエネルギーが爆発するすばらしいものでした。1年目の秋から生徒会を任せられたとき、この学校の伝統に見合う生徒会活動が創れるか大変不安でした。とにかく生徒に最大限の時間を与えようと決意し、生徒のペースで活動を創ることに心掛けました。大人では5分で済むようなことでも、子どもは半日かかることもあります。その一見無駄と思える時間が大切だということが、思い出すと今でも涙がこみ上げてくる感動の学校祭につながったように思います。条件さえ整えてあげれば、子どもは大人以上の力があることをこのとき学びました。

次の学校では、生徒指導の本質を学びました。その学校には、生徒指導の本質をとらえ、しっかりとした指導のできる若手教員が多数いました。その場限りで上辺だけの指導に終始してきたこれまでの自分を恥じ、若い先生に教を請う日々でした。イレギュラーな行動を起こす生徒の指導は、終わりの見えないトンネルを歩くようで疲労感・無力感に襲われがちです。しかし、魂と魂のぶつかり合いは、生徒との心のつながりを強く意識できるものだというように徐々に気付きました。卒業後の彼らとの関係を考えると教師冥利に尽きるとも思えてきます。そのほか行政では、教育は決して現場の教員だけで作られているのではなく、社会全体が支えていることを学ばせてもらいました。ここで得た広い視野が、教頭時代に生きたように思います。振り返れば、がむしゃらに突き進んできた29年間でしたが、数多くの失敗とほんの少しの成功経験が私にはあります。この経験が、この職場で生かされれば幸いに思います。

## 篠原 岳司 しのはら たけし

2010年4月1日に機関研究員として着任しました篠原岳司です。ご縁があり福井大学の教職大学院に勤められることをとても喜んでおります。出身は北海道札幌市。これまでに大学時代を神奈川や東京、大学院時代を地元北海道で過ごしてきました。福井県には学生時代に車で旅行中に立ち寄った程度、着任以来すべてに新鮮な毎日を過ごしています。これから皆さんに御指導いただきながら、福井の教育事情や教職大学院の取組はもちろん、政治経済、歴史や風土、土地柄や県民性など、福井について幅広く学び体験していければと願っています。

さて、自己紹介の機会をいただきましたので、これまでの私の歩みや、研究における問題意識、福井大学での抱負などを述べさせていただきます。

**これまでの歩み** 私は2009年3月に北海道大学大学院教育学研究科から課程博士号を取得し、2009年度4月からは母校の北海道大学やアメリカの大学でポスドク生活を送っていました。これまでに複数の大学で非常勤講師を務めた経験はありましたが、就職は福井大学が初めて、いわゆる「初任者教員」です。社会人として至らない点もあるかと思しますので、どうか御指導いただければと思います。

専門は教育行政学、学校経営学です。これまでは、主にアメリカの大都市を対象にして、教育行政・制度・政策・政治の視点と学校自治や学校経営の視点の双方から、教育改革と学校改善の具体的な取組を見てきました。大学院入学前には独立宣言の街として知られるフィラデルフィアに9か月滞在する機会があり、アメリカの大都市における公教育の荒廃を目の当たりにしてきました。大学院時代には、公教育の荒廃が著しい反面、学校自治で先進的な取組を見せていたシカゴや、教育委員会を中心に専門職としての教師の力を改革に生かそうと奮闘するボストンに足を運んできました。いずれの都市でも、子どもの貧困や青少年犯罪など、子育てと教育に困難な現実がありながら、その困難に敢然と立ち向かう現場の校長と教職員、教育行政職員や地域のNPO職員らに出会うことができました。研究を通し、教育に希望を感じられるとても貴重な経験を積んでこられたと振り返ります。今後もアメリカの大都市の公教育改革の実態を政策と実践の両極から分析することを通し、教育と人間、教育と社会、教育と国家の関係を深く考えていきたいと思います。

**研究における問題意識** ところで、これまでの歩みや教育行政学という専門からすると、学校現場の授業実践や教師教育の専門領域から距離がある人と思われるかもしれませんが。実はそのとおりで、これは私のジレンマでもあり、常に頭から離れない課題だとも言えます。そのため私は、欧米で研究が進む「分散型リーダーシップ (Distributed

Leadership)」の考え方に注目し、学校現場における具体的な実践の姿やその論理から、あるべき組織や制度の姿をイメージしたいと思うようになりました。

「分散型リーダーシップ」と言っても論者によって定義は多様ですが、私が注目したスピラーン (Spillane) はヴィゴツキーやワーチら発達心理学の理論を応用しながら、「リーダーシップの実践は、リーダーとフォロアーと状況という三要素の相互作用によって構成されている」という表現でこの理論を説明しています。この考え方は従来のスクールリーダーシップ研究にとって画期的なものです。なぜなら、学校を改善し優れた教育を実現していくためのリーダーシップは、リーダー個人の英雄的な実践によるものではないとし、学校にかかわるすべての関係者と人工物 (アーティファクト) との複雑で相補的な関係性が土台になってこそ高められていくことを示しているからです。

私はこの理論を、校内における授業づくりの問題を学校づくりの問題へと必然的に結び付ける理論であり、学校経営、校内組織作り、さらには教育行政レベルの教育条件整備や一般行政や政治との調整問題、学校が存立する地域の社会経済状況等の問題とも接続する学校改善の実践論だと解釈しています。教育行政学の研究者として、この理論に学校現場の教師の実践とのつながりを見だし、行政・制度研究の課題を学校現場から発信するスタンスを構築していきたいと考えています。

**福井大学での抱負** そのためにも、私自身が学校現場に直に足を運び、先生方の実践に学び、そして共に課題を考えていく経験を積み重ねなければならないでしょう。これまで母校の北海道大学にて「スクールリーダーシップ研修」の運営に携わり、北海道の未来を担う子どもたちを育てるべく学校改善に意欲を燃やす先生方を共同研究者として迎え、貴重な勉強をさせていただく機会を得てきました。この度の福井大学教職大学院への着任は、その経験も生かし、自らの理解を更に発展させていく貴重なチャンスになると信じています。スタッフとしては未熟で至らない点も多々あるでしょうが、教職大学院の中でやや異彩を放つ専門領域を持つことを自覚し、それを強みに変えながら、スタッフの皆さま、そして院生の皆さまと共に成長していきたいと思います。これから、どうぞよろしく願いいたします。



# 院 生 紹 介

## 森崎 岳洋 もりさき たけひろ

今年4月から福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)のストレートマスターとして、福井市至民中学校でインターンシップを行っている森崎岳洋です。社会科教員を目指しています。「若さ、さわやか、元気」が長所の22歳です。この文章を書いている現在、インターンシップが始まって2週間が経ちました。私は、このインターンシップにとても大きな魅力を感じています。

私は、大学4年間の中で教育実習が一番の学びだったと思っています。教育実習については、3年次に福井大学附属中学校で4週間、4年次に福井市社西小学校で2週間させていただきました。これらの実習の中で、児童生徒に合わせた授業づくりをすることや児童生徒を指導することの難しさを知りました。また、子どもとかかわることの楽しさを再確認したり、学校祭などの行事を通して、子どもが成長していく場面にかかわることの喜びを感じたりすることができました。それぞれとても短い期間でしたが、教育実習ではとても貴重な経験をすることができました。また、この教育実習で教師になりたいという意志が更になりました。そのため、教職大学院の長期インターンシップを魅力的に思い、教職大学院への進学を決めました。

長期インターンシップでは、様々なことを学びたいと思っています。その中でも特に、授業力を付けたいと思っています。

います。教師が子どもとかかわる時間の中で、一番長い時間を共にするのは授業です。そのため、私は教師の力量として一番大切なことは授業力だと考えています。

インターンシップでは、様々な先生方の授業を参観することができます。また、自分も授業を行います。さらに、自分が授業をした後には担当教員のアドバイスなどをいただき、振り返りを行います。「他の人の授業を参観すること」「自分が授業を行い、担当教員と振り返りを行う」ことにより授業力が身に付くと考えます。インターンシップが始まったばかりで授業を行う機会はまだまだありませんが、たくさんの授業を参観して自分の学びにつなげたいと思っています。

至民中学校では、70分授業や教科センター方式、異学年クラスターなどを取り入れ、新しい教育の形を提案し続けている学校です。とまどいはありますが、早く慣れて至民中学校の一員として認められるように自分から率先して様々なことにかかわっていきたいと思っています。



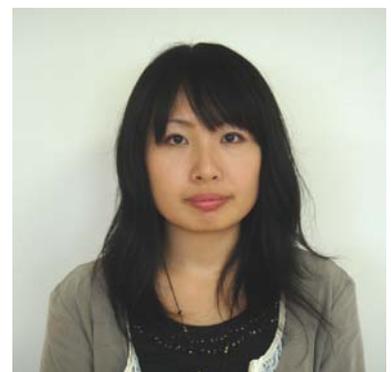
## 斉川 歩 さいかわ あゆみ

こんにちは。今年度、教職大学院に入学しました斉川歩です。これから1年間、附属特別支援学校で長期インターンシップをさせていただくことになりました。

私は、学部のとき、小学校で1か月、中学校と特別支援学校で2週間、教育実習を行いました。これらの実習では、授業を組み立てていくことを中心に考える中で、子どもを理解し、子どもの意欲を引き出すことの難しさを感じました。子どもとかかわり方や授業の展開の仕方について悩み、つらいこともたくさん経験しましたが、子どもの

笑顔を見たり、「分かった!」という言葉の聞いたりすることで、少しではありますが教師としての喜びやうれしさを実感することができました。

実習での毎日は多くの刺激があり、私の教師への夢を大きく膨らませるものでした。しかし、こ



れら実習で経験したことは、教師の仕事のほんの一部であり、私の知らない仕事はまだ多くあると思います。授業をすること以外の、授業計画や学級づくり、学校の運営や保護者との連携の取り方など、学部の教育実習では経験できなかった教師としての仕事を、短期間ではなく1年という長期のインターンシップの中で学んでいきたいと思いません。

学校の現場に入ると、分からないことばかりで、悩みなども多々出てくると思います。教職大学院の魅力でもあるカンファレンスやラウンドテーブルを有効的に活用していきたいと思いません。自分一人で問題を考える時間も必要ですが、いろいろな人の意見を聴くことによって、その問題を多面的にとらえる視点を持つことも重要だと思いません。現職の先生方や先輩方は、私たちよりも経験を積んでいるので、吸収できるものはたくさん吸収していきたいと思いません。また、同じ1年生の仲間と一緒に悩んだこ

とも、きっと自分の糧になると思っています。

教職大学院では長期インターンシップの実践記録を書きます。私は卒業論文では実践記録論について研究し、実践記録の良さや書く意味などを学んできました。そのため、実践記録をただの記録として終わらせるのではなく、意味のある実践記録にしたいという思いを強く思っています。私は、実践記録を書き、他者と共有することで子どもを理解していきたいと考えています。そのような意味のある実践記録を書くためにも、記録を書くことに自覚的になり、日々の記録をデータとしてきっちり残し、それらをカンファレンスやラウンドテーブルなどで省察し、再構成していきたいと考えています。教師の仕事の総体を体験し、日々の実践と省察を繰り返すことで、教師に求められる力を培い、自分なりの実践に対する視点を持って取り組みたいと思いません。

## 内田 真希 うちだ まき

こんにちは。4月から教職大学院教職専門性開発コースに入学した、内田真希です。これから1年間、附属小学校でインターンシップをさせていただくこととなりました。

私は、学部時代の教育実習では目の前にあることに追われながらも、多くのことを学ぶことができました。その中でも、児童生徒理解の大切さ、そして子ども理解が授業づくりの上で重要なことを強く実感しました。しかし、児童生徒指導の点では、適切に指導・対応することができないまま、実習を終えることになってしまいました。また、学級開き後、先生方がどのようなはたらきかけを行い、子ども同士や子どもと先生の間をどのように築き、学級経営していったのかを知るには教育実習期間だけでは足りず、私にとって興味深いテーマとして残りました。そこで、卒業研究では学級づくりの時代の変遷を追っていくと、実際に学校で今行われている学級づくりが知りたくなりました。

福井大学教職大学院では、長期インターンシップという制度があります。卒業研究で学んだ知識を頭の片隅に置き、実際にどのように先生方が学級づくりに取り組んでいるかを、学んでいきたいと思いません。学級開きの日から、学級内での人間関係がどのようにできていくのかを見られることはとても興味深く、今からとても楽しみです。また、教育実習の短期間では知ることのできなかったことも多

くあると思いませんが、今回のインターンシップでは職員会議や学団ごとの部会に参加させていただきます。

先生方の研究する

姿に触れ、様々なことをお手伝いさせていただく中で、多くのことを吸収し、教師の仕事の総体への理解をより深めたいと思いません。さらに、大学院では同じインターンシップを行う院生や大学の先生方、スクールリーダーの先生方と共に、カンファレンスやラウンドテーブルが行われます。インターンシップに行く中で疑問に思うこと、分からないこと、悩みなども出てくると思いますが、様々な意見を聞き、伝え、考える中で、自分なりの答えを見付けられるようにすることを目標にしたいと思いません。

学ぶ機会に恵まれた環境であることに感謝するとともに、この機会を無駄にしないよう、学びに貪欲になり、一つ一つのことに丁寧に取り組んでいきたいと思いません。様々な立場の方と接する機会があるので、刺激されながらもその都度自分なりに考えることを忘れず、今よりも成長できたらよいなと考えています。



## 法山 裕子 のりやま ひろこ

本年度から、教育学研究科教職開発専攻で勉強することになりました法山裕子です。これから1年間、福井大学教育地域科学部附属小学校においてインターンシップをさせていただきます。配属クラスが決まり、年度始めの職員会議にも参加させていただいた今、「いよいよだ」と背筋の伸びる思いでいます。

私が教職大学院に進学を決めたのは、日々の省察を行いながら現場に入って経験を積むことができるということに魅力を感じたからです。2年前、私は1か月間の教育実習で、現場に入って学ぶことの大切さを実感しました。当時、私は、子どもに会う前からあらかじめ指導案を作っておき、実習に挑みました。しかしながら、実習が始まり、児童の授業を受ける様子を実際に見て、これではだめだと気付きました。私の授業案は、「自分がこう進めたい」「このように働き掛けたい」という一方的な思いが先行していて、子どもの存在を無視していたように思います。また、担任の学級づくりに懸ける思いに触れ、常に子どものことを思い、正面から熱心に向かっていくことのすばらしさを知りました。この経験を通して、私も現場で子どもや先生方とかかわって学んでいきたいという思いを強く持つようになりました。

「インターンシップでは『学びの種』がたくさんある」事前説明会での岸本先輩の話の中にあつたこの言葉が、と

## 土田 真衣子 つちだ まいこ

こんにちは。今年4月から、福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学しました土田真衣子です。インターンシップの受入れ校である福井大学附属中学校で学ばせていただくことになりました。

私はずっと小学校の教員を目指しており、主免実習でも附属小学校で4週間お世話になりました。そのため、インターン先の希望は小学校で出したのですが、最初のオリエンテーションで附属中学校と発表されたときは不安ととまどいでいっぱいでした。しかし、子どもたちと一緒にかかわっていくということには変わりはありません。むしろ、私は副免実習で2週間しか中学校に携わっていなかったため、新鮮な気持ちでインターンがスタートできると、逆に、楽しみになってきました。早速、4月1日には第1回職員会議に参加させていただきました。緊張感漂う中で、全教職員の方と顔合わせをし、改めて気持ちが引き締まる思いがしました。



でも印象に残っています。先生方のちょっとした働き掛けであっても、深い意味が込められていたり、子どもの言動一つをとっても、その中に成長を見いだすことができたり…。1年間という長いスパンで現場に入ることで、新たに見えてくることはたくさんあると思います。常にいろいろなところにアンテナを張り巡らせ、このような「学びの種」をつかんでいきたいと思っています。そして、院生や先生方とのカンファレンス、スクールリーダーの先生方との合同カンファレンスを通して、その学びを更に深めていきたいと思っています。

頑張ろうと意気込む気持ちと同じくらい不安な気持ちもありますが、親身になって私たちにサポートして下さる教職大学院の先生方や先輩方、共に学び、高め合うことができる同期の仲間にも恵まれた環境の中で学習ができることをとても幸せに思います。これからの2年間を有意義なものにするため、研究課題を明確にし、一日一日を全力で取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお祈りします。



私が教職大学院に進学した主な理由は、二つあります。

一つ目の理由は、1年間というサイクルを通して、

様々な個性を持つ子どもたちに合わせた授業づくり、共に学習して作り上げていく授業づくりというものを学んでいけるという点です。正直、最初は講師をしながら教員採用試験の勉強をしてもいいかなと考えていた時期もありました。しかし、主免実習、副免実習などを通して、“授業”と“子どもたち”とはとても密接に関係していることに気付きました。いつも指導書片手にどんな授業をしようか考えていた私にとっては、衝撃的な気付きであったと同時に、子どもたちのことを何にも考え

ていなかったと恥ずかしくもなりました。

二つ目は、教師の一員として共に学校運営をお手伝いできるという点です。インターンという立場上、週に3回しか現場に入れません、様々な会議や実践研究会に参加させていただけるし、見えにくい仕事であるシャドーワークにも触れることができます。例えば、一年生の担任は、児童が使用するマジック一本についてもしっかり考えながら準備していました。どのメーカーを選ぶか

## 高村 領 たかむら りょう

本年度、福井大学教職大学院の教職専門性開発コースに入学いたしました、高村領です。3月までは三重大学に在籍していました。保健体育科の教員を目指していて、これから1年間、附属中学校でインターンシップをさせていただきます。

私は、元々、行政職に就き、スポーツ振興に携わっていきたくて考えていました。そのための役立つ資料になればと思い、卒業論文ではスポーツ人口を増加させるための手立てについて、それまで行ったどのような政策がスポーツ人口増加に結びついているのかを検討するため、数都市にアンケート調査及びインタビュー調査を実施しました。調査の過程で、ある都市の市役所の職員さんにインタビューを行ったところ、小さいころから運動することを習慣化し、その年代が上がって成人となったときのスポーツ実施率が高くなることを期待して、小中学生のスポーツ活動に力を入れているとの回答をいただきました。その観点が私には新鮮であり、体育や部活動などの形で子供とかかわっていくことができる教員という職業を意識し始め、卒業論文の進行やその後の生活の中でその思いが一層強まってきて、教員を目指すようになりました。しかし、指導力など、まだまだ力不足だと感じたことから教職大学院への進学を考え、現在に

## 内山 里香 うちやま りか

はじめまして。教職大学院教職開発専攻に入学した内山里香です。担当教科は国語です。現在、福井市木田小学校で低学年支援の非常勤講師として勤務しながら勉強させていただいています。

私は今までの講師経験の中で、特別支援クラス、教科センター方式、クラスター、担任、部活顧問など様々な経験をさせていただきました。様々なジャンルの経験をしていく中で、多くの棚を用意してもらっているにもか

や、なぜマジック一本一本に番号シールをはるのかなど、一見どうでもいいように思えることが意外と重要だということが分かりました。

これから2年間、同じ教職開発専攻の仲間はもちろん、現職の教員の方々やスクールリーダーの方々と共に頑張っていきたいと思っています。



至っています。

大学院1年では、週3回のインターンシップと週1回のカンファレンスが主な活動となります。私は上記し

たように附属中学校にお世話になっています。学校にいる間は、先生方と同じように職員会議に出席し、研究にも携わります。教育実習のころを思い出せば、1回の授業を行うことがとても大変でした。現職の先生方が、授業はもちろんのこと、学級経営やそのほかの校務など、たくさんの仕事を同時にこなしていることを考えると私の課題は山積みです。また、実習で子供との距離をうまく形成できずに痛い思いをしたことや、人前や改まった場で緊張して話せなくなってしまうことなどもありました。この1年間のインターンシップ、またその後の学びを充実させ、少しでも多く課題を克服できるよう行動していきたいと思っています。

福井大学内の施設名や仕組みなどもまだ分かっていない私ですが、大学や附属中学校の先生方をはじめ今後お世話になる皆様、どうぞよろしくお願ひします。



かわらず、その中の引き出しを自分自身が持っていないことに気付いたので。そのきっかけとなったのが、福井市至民中学校勤務時の出来事です。びょうぶの絵を通して様々なこと

を考えるとという小学校の授業を参観していた時のことでした。授業と一緒に参観していた津田先生が「このびょうぶを子どもたちが商人になって売り込ませる授業をすると楽しいね。」ともらされました。その言葉を聞いて「そのような授業をしたら楽しいだろうな。考えさせる授業とは無限なんだ。」とワクワクしたことを今でも覚えています。国語の授業を考えることがとても楽しくなりました。時間があれば他教科の授業を見せていただいで多くの刺激を受け、また自分の授業を考える。そ

## 佐々木 庸介 ささき ようすけ

こんにちは。4月から教職大学院のストレートマスターとして、福井市至民中学校でインターンシップをさせていただくことになりました、佐々木庸介です。福井大学教育地域科学部学校教育課程障害児教育コース出身ですが、中学校の理科教員を目指しています。私は特別支援学校、小学校、中学校で教育実習を行ってきました。特別支援学校では1か月、小学校と中学校はそれぞれ2週間の短期間ではありましたが、生徒と共に学んでいくという教職の楽しみや喜びを感じることができました。その中で自分の学んできた「理科教育」と「障害児教育」のすべての知識を総動員し、「自分の得意な理科で、苦手な子どもから得意な子どもまで、すべての子どもたちがよりよく学ぶことができる授業や教材を開発していきたい」という思いが強くなりました。教育実習では一つ一つの授業を考えるだけでしたが、教職大学院の長期インターンシップにおいては1年を通しての授業展開を考えることができるため、よりよい理科教育を学ぶことができるのではないかと感じています。

卒業論文では「理系・文系とは何か ～ワーキングメモリ容量を指標とした検討～」という研究を行い、脳波を利用した脳機能検査を行っていました。脳科学の研究成果を教育にいかに関用できるかを「理系・文系」とい

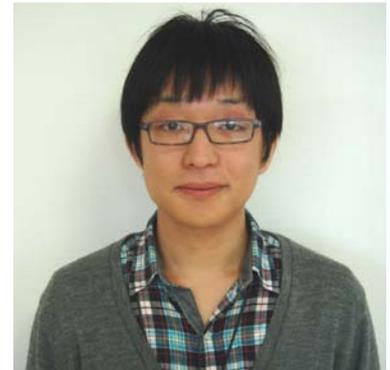
## 林 克磨 はやし かつま

今年度、福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学しました林克磨です。

昨年度までは、福井大学教育地域科学部学校教育課程社会系教育コースに所属していました。そこでは社会科教育法をはじめとした教科の指導法を学びました。そして、教育実習、ライフパートナー、探求ネットワークという3つの実践的な学習が、私の課題を浮かび上げさせ

してこの繰り返しの中で、自分にはきちんとした理論が薄いことに気付きました。子どもが考えることにワクワクするような授業をもっとしたい。子どもが「ハッ」と気付くような授業をもっとしたい。それが大学院に入学した理由です。

この2年間、素晴らしい環境の中で勉強できることに感謝しながら、自分自身も多くのことを考えながら学んでいきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



う側面から検討することによって、理系教科が苦手な児童生徒にとってどのような教育を行っていくべきかを検討していくことが目的でありました。これらの研究を生かすためにも、教員に必要な専門性を学び、現場の教育へとつなげていきたいと考えています。

まだ始まったばかりではありますが、木曜カンファレンスでは同じ専攻に所属する院生と悩みを打ち明け合ったり、討論し合ったりすることができるため、非常に楽しいです。私は3年間探求ネットワークで活動してきたこともあり、そのような学習が好きです。カンファレンスには先生方も参加してくださり、私たちの学びを支えてくださっています。先生方のお話によって様々なことに気付かされ、「次はこうやってみよう」と日々新しいチャレンジをしていくことができています。このような学習の場に参加できたことの喜びをしっかりとかみしめながら、日々の省察をしっかりと行い、充実した2年間を過ごしていきたいと考えています。



たのです。

特に、教育実習では、主に、授業を通じた教科指導を学習、経験しました。指導案づくりに

追われる毎日でしたが、その甲斐もあり、授業のノウハウを学べたことで自信を付けることができました。しかし、授業以外の生徒指導面などからの学習は正直なところ少なかつたと思います。それは機会がなかったからにほかなりません。1か月半という実習期間にできることは限られていました。探求ネットワークで重視してきた子どもたちにはぐくもうとしている力と比較したり、生かしたりすることができなかつたことが残念でした。また、授業も割り当てられたコマ数をこなす形になるので、年間の授業構成や評価の方法を学ぶまではいきませんでした。私にとってそれらは大きな不安でした。まだまだ知らない教師の仕事や学ぶべきことがあるはず。教職への第一歩、基礎となる時期に、ライフパートナーや教育実習で省察に生かせなかつた記録をとる習慣付けや協働などについて考えたいと思い、大学院の門をた

たきました。

教師の仕事の総体や責任を長期期間にわたって実際に教育現場で学ぶことができるのが大きな魅力だと思っています。私は4月から拠点校の一つである坂井市立丸岡南中学校にインターンとしてお世話になっています。教科センター方式や「ひとり立ち清掃」などが特徴的で、生徒も教員も活気にあふれています。インターンシップでは、学部での教育実習とは異なり、職員会議をはじめとした教師の仕事を経験させてもらえることをとてもうれしく思います。今まで知らなかつたことを学ぶことが楽しみで仕方ありません。自分の行動次第で何でも学ぶことができます。自由ということが責任感を高め、ほどよい刺激になっていると感じています。これから意義のある大学院生活を送っていきたくと考えていますので、よろしくお願いいたします。

# お知らせ

## 教育目標・評価学会 中間研究集会のご案内

日時 2010年5月22日(土) 13:30~17:00 (13:00 受付開始)  
会場 福井大学 文京キャンパス 総合研究棟 13階 会議室  
テーマ 専門職として学び合うコミュニティを支える評価の構造  
—福井大学の取り組みを事例に—

### 報告者

牧田 秀昭 (福井市至民中学校)	学び合うコミュニティとしての学校を支えるもの —教職大学院拠点校の取り組みから—
松木 健一 (福井大学)	学校拠点の教職大学院における評価の重層性 —協働実践研究によるFDへ—
八田 幸恵 (福井大学)	学習の専門職としての教師に必要な能力をどう保証するか —教員養成スタンダード策定の取り組みから—
柳沢 昌一 (福井大学)	持続的発展を支える省察の基盤 —実践コミュニティのフラクタル構造—

コメンテーター 石井 英真 (神戸松蔭女子学院大学)  
田中 耕治 (京都大学)  
司会 遠藤 貴広 (福井大学)

### 企画趣旨

政権交代後、急展開を見せている教員養成・教師教育改革。民主党案のモデルの一つになっている福井大学教職大学院。本研究集会では、専門職として学び合うコミュニティ (professional learning communities) の実現に向けた福井大学の取り組みの全貌を概観しながら、そのコミュニティを支えている評価の構造に目を向け、教育目標・評価研究の新たな課題を探ります。

なお、同日 11:30~12:30 に総合研究棟 13階会議室で、京都大学の西岡加名恵氏による特別講演「今後の評価の在り方について—指導要録改訂のポイント—」(福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 [教職大学院] 主催) を開催いたします。こちらも参加費無料、参加申込不要ですので、併せてご参加下さい。

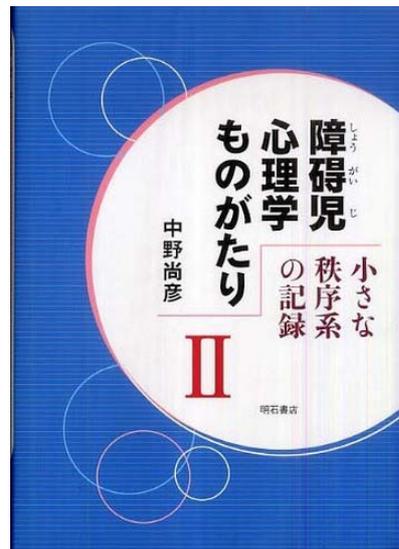
問い合わせ先 遠藤 貴広 (福井大学) 0776-27-8964 endo@u-fukui.ac.jp

## 障害児心理学ものがたり 小さな秩序系の記録Ⅱ 中野尚彦 明石書店

笹原 未来 (福井大学教職大学院)

「こどもの個としての体験をおとなが自身の個の体験として共有する、それが教育の場における知識と個の体験を繋ぐ溶媒ではないか。どのような知識もこの溶媒によって個の体験事実置き換えられなければならない。」「個の体験事実の確定による実践研究は、個々の事実の確定にとどまらず、行動の系譜発生的な知識の系として集積していくのではないかと思う。」(障害児心理学ものがたり 小さな秩序系の記録Ⅰ より)

こどもに寄り添いながら、こどもとの事実の確定共有を求めて係わる。進むべき道を探しあぐねて時に立ち止まりながらも、こどもの秩序に則して考え、こどもが一步踏み出すための足場を作り、また進む。本書は、こどもと著者が歩んできた踏み石の記録であり、個と個が織り成す創造的な営みとしての教育的係わり合いの中で得られた著者の体験事実の集積である。



「秩序あるべきものが無秩序に見える。そして無秩序に見えるものの秩序が、あるとき明らかになる。そういうことであるが、無知であれば相手が無意識にみえる。隠された秩序がそこにあるはずだ、そう思わなければなかなか見えてこない。こどもについて知るということは、しばしばそういうことである。」(障害児心理学ものがたり 小さな秩序系の記録Ⅱ より)

あらゆる生命体は秩序系である。一見無秩序に見えるバクテリアの動きにも秩序がある。

どんな障害があろうとも、人はその人の秩序のもとに生きる。本書では、心理学の知見を交えながら、著者の鋭い洞察を通し、秩序系としてのこどもたちの繊細な姿が丁寧に描き出される。

### Schedule

4/24 sat -25 sun 合同カンファレンス (9:30-17:00)

5/19 wed 運営協議会 (10:00-12:00)

5/22 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)

6/4 fri 福井大学附属中学校研究集会

6/12 sat 福井大学附属幼稚園公開保育研究会

6/26 sat -27 sun 実践研究福井ラウンドテーブル

【編集後記】 新年度を迎え、教職大学院はこれまで培ってきた学びの文化を再確認しながら、更なる飛躍と深化を目指した一步を踏み出しました。今回の Newsletter No.21 では、松木専攻長に教職大学院の学びの文化を意味付けていただくとともに、スタッフとして新たに加わった先生方、教職専門性開発コースの新入生 9 名に教育・研究・学びの履歴と展望を示していただきました。文化は人と人とのつながりによって網の目のように広がり、深まり、培われていくことを、改めて実感できる思いがします。(木村)

教職大学院 Newsletter **No.21**

2010.04.24 発行

2010.04.24 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtkukui@yahoo.co.jp